

## ～ 土から出たものは土にしてから土へ返せ ～

無農薬の農法は、化学肥料をやめて有機質肥料で土を肥やすことに解決の糸口のあることを知って、私はそれを実践してみた。

うまく成功することもあったが、又とんでもない病虫害が発生して大損害を受けることもあって、収穫の安定性はなかった。安定した収穫が期待出来ないような農法は意味がない。

いろいろと工夫したが、うまくゆかなかった。

昭和三十五年の初夏であった。町から六キロほど離れた山の上の農家へ往診に出かけた私は、山の麓で単車を乗りすてて、往診鞆をさげながら雑木林の中の小径を登って行った。

私の頭はうまくゆかない農法のこと一杯であった。嘲笑を混えた同情の言葉が頭の中を去来した。今更ながら、現在の自分の立場の苦しさをひしひしと感じて、心は重かった。

雑木林の緑の葉はなんと美しいのだろう。

「やあ、やあ」、彼らは親しそうに私に語りかけているようだった。

私は思わず立ち止まった。苦悩で冷え固まった私の心を、言いしれぬ温かく平安な大自然の靈気がやさしく解きほぐしてくれている。往診鞆を下に置いて、新緑の柔らかい葉にそっとふれてみた。

ふと気がついた。

「こんなに密生しながら、これらの木々はすごく元気だなあ。一体このエネルギーはどこからくるのだろう…。勿論落葉だ。それにしてもこれだけの木を育て上げるとは…。落葉というものは大変なエネルギーがあるのだなあ」

私はしゃがんで落葉を掴んでみた。ぷうんと懐かしい香りがした。更に深く掘ってみた。腐蝕した小枝や菌糸が出てきた。香ばしい匂いは更に強くなった。更に深く…。

「そうだ！」

この時私は、無農薬有機農法解決の端緒を得たのである。今までの失敗の原因がはっきりした。

自然界の堆肥は落葉や枯草が地上に積もって、その一番底の、大地に接する部分から出来上がる。そこは空気が十分通うから好気性微生物が活動して堆肥をつくる、いわば好気性完熟堆肥である。これが植物の本然のたべものである。

それなのに、今まで私は生の有機質を土の中へ埋めていた。そこでは空気が充分通わない。だから嫌気性微生物が繁殖する。即ち腐敗が起こり、嫌気性堆肥となる。これは植物にとって正しいたべものではなくて毒物である。この時発生するガスや中間分解産物が植物の根を傷め、又それが吸収されて植物を異常生育せしめて、植物の生命力を弱らせる。だから病虫害が発生するのだ。

篤農家が教えてくれた「土から出たものは土へ返せ」は一言足りなかったのだ。

「土から出たものは土にしてから土に返せ」だ。

「完熟堆肥は土の中、未熟堆肥は土の上」

大声で叫びたいような衝動に駆られて、私は香ばしい大気を深く深く吸いこんだ。緑の木々は讃歌をうたって祝福してくれるようだった。

掘った落葉を、又もとのように埋めて、私は往診鞆をとり上げた。